

創造における不手際

へげぞぞ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シヨートシヨート集です。

特技は、「空想科学」と「哲学」。

目次

釈尊の生涯	1
シヤバ僧経典	3
井戸の所有	7
神を近所で探す	11
中世イタリアの半球世界	13
楽欲と求道	16
土着神と来訪神	18
海蔵経典	21
西洋の神を日本で探す	24
ブリハッドの神学的応用	26

釈尊の生涯

1、カピラ城

釈尊はルンビニのカピラ城で生まれた。

釈尊は、背中に「天上天下唯我独尊」と書かれた特攻服を着て生活した。

2、出家

釈尊は、働くのが嫌になって、

「研究生活に打ち込みたい。社畜暮らしは嫌だ」

と行って、妻子を残して家出した。

浅田彰の「逃走論」を鞆に入れて持っていたという。

3、菩提樹

釈尊は、ブツダガヤの菩提樹の元で悟りを開いた。

「すごいのはこっちの木の方ではないか」

という人もいて、

「そういうこともある」

と釈尊は答えた。

4、初転法輪

釈尊は、ベナレスの鹿の園で初めての説教をした。

釈尊は真理を悟ったといった。

それは、以下のことである。

一切の形成されたものは無常である。(諸行無常)

一切の形成されたものは苦である。(一切皆苦)

一切の形成されたものは我ならざるものである。(諸法無我)

真似をすれば、みんな悟って覚者になれるといった。

5、乞食の王

釈尊は、祇園精舎(慈悲と施しを与える園)で乞食の王となった。

諸国の王たちに戦争について相談を受けて作戦を与えた。

戦えば負けるのになぜか国が豊かになる謎の司令官であった。

釈尊の国は、無勝荘嚴国として繁栄した。

注：「無勝荘嚴国」とは、プラトンのいう「正しいものは損をして、

不正なものが得をする」という哲学の反駁であり、勝つことなく幸せになる聖者の道である。

6、平等

ある王さまの軍が負けそうになった。

負けそうな王さまは、釈尊に作戦の助言を求めた。

釈尊はいった。

「今からいちばん簡単な作戦を授けるよ。あなたの国の兵士はみんな平等だ。司令官も参謀も幹部も一兵卒もみんな平等だ。みんな平等に適当に相談して戦うぞ。実は、戦争とはそうするだけでたいいてい勝てるんだ」

そして、策を授かった王さまの軍は敵を打ち破った。

「平等にするだけで勝てる戦いなのに、不平等にして戦って負ける作戦を、平等以下の作戦というんだ。」

その国は、以後、平等の国といわれるようになった。

7、沙羅双樹

釈尊は、沙羅双樹のもとで死んだ。

多くの者が集まり、本当に死んだのか話し合った。

「彼は生きている時に説いていたぞ。あらゆる識覚を消せば、ニルヴァーナに到達できると。死ぬと識覚が消えるんじゃないのか。ということとは、彼はニルヴァーナに入るんじゃないのか」

「わかりません。わたしたちがもし死んだら、ニルヴァーナを探しましょう」

釈尊の死体は火葬され、遺骨はバラバラに砕かれて、仏舍利として寺院に配られた。

8、経典輪廻

釈尊は、文書転生体となり、後世に書かれた哲学書の中を輪廻した。

注・筆者は、釈尊の思想としてなければならぬ教え、「無執着」を書き忘れていたことに気づいた。「無執着であるべき」というのは、仏教の重要な教えであり、筆者が人生でものを考えるのに非常に役立つた教えであることを、みつともなくだだ、書き加える。

シヤバ僧経典

不伝（伝わらず）。

阿弥陀の極楽浄土は、その世界が伝えられなかったので、不伝という。

シヤバ僧：なあ、宝の地図を教えてくださいよ。見つかったらすごい幸せになれるやつ。

破戒坊主：宝の地図は仏教ではない。

シヤバ僧：寺に来るやつはみんな、宝の地図がほしいんだよ。おれは知ってるぜ。仏教って宝の地図だろ？

破戒坊主：そんなわけないだろ。

シヤバ僧：極楽って、すごい宝のことだろ。

破戒坊主：そうだ。

シヤバ僧：あんた、極楽って知ってるか。

破戒坊主：ちゃんと知っておる。

シヤバ僧：極楽には何があるんだ。

破戒坊主：金銀財宝が山となった寺、幻獣が遊ぶ庭園、花と宝石の雨が降り、絶え間なく音楽が聞こえる土地だ。

シヤバ僧：それは誰のものだ。

破戒坊主：みんなのものだ。そこでは神々も人々も平等だ。

シヤバ僧：極楽はどこにあるんだ。

破戒坊主：世界の中だ。

シヤバ僧：道を教えてくれ。極楽に行きたいんだ。

破戒坊主：ダメだ。極楽は滅んだ。

シヤバ僧：なんだって？

破戒坊主：極楽は滅んだ。

シヤバ僧：それはおれを行かせないための嘘か？

破戒坊主：ちがう。極楽はむかしはあったが滅んだ。行きたければ、時の巡礼でもしてくれ。

シヤバ僧：ここは汚れた土地だな。

破戒坊主：そうだ。

シヤバ僧：極樂の話が聞きてえ。

破戒坊主：これ以上、聞きたければ、年会費を払え。

シヤバ僧：ケチくせえ坊主だな。

破戒坊主：聖人君子といえども、生活費がかかるからな。

シヤバ僧：そんなにお金を貯めこんで、何をしているんだ。

破戒坊主：読経だ。

シヤバ僧：読経するためにインチキ宗教を教えってるのか。

破戒坊主：そうだ。

シヤバ僧：読経の他には何をするんだ。

破戒坊主：念仏百万遍だ。

シヤバ僧：それで極樂へ行けるのか。

破戒坊主：それは賭けだ。人生を賭けた賭け。寺を賭けた賭け。教団を賭けた賭けだ。仏教は賭けだ。うちの寺は、極樂へ行けるといいう賭けをしているのだ。

シヤバ僧：極樂へ行くにはどうしたらいいんだ。

破戒坊主：探すより、自分で作った方が早いだろうな。

シヤバ僧：どうやって作るんだ。

破戒坊主：花と宝石と音楽と美容の研究をすれば、ひよつとしたら極樂ができるかもしれん。

シヤバ僧：くそ面倒くさいな。

破戒坊主：そういうものだ。やる気があつたら作ってみろ。わしもおまえの作った極樂へ行きたい。

シヤバ僧：他人任せかよ。

破戒坊主：読経や念仏をするより可能性は高い。

シヤバ僧：それわかかっててなんで自分で作らないんだよ。

シヤバ僧：おい、仏教ってなんだ。

破戒坊主：いろいろある。

シヤバ僧：例えば？

破戒坊主：仏教は、乗り物だ。仏教は、薬草だ。仏教は、薫陶だ。

シヤバ僧：そういう例えじゃくてさ。

破戒坊主：南無阿弥陀仏と唱えろ。

シャバ僧：それで極樂へ行けるのか。

破戒坊主：うちの寺ではそれしか教えておらん。

シャバ僧：何か隠していることがあるんじゃないのか。

破戒坊主：ある。

シャバ僧：それはなんだ。

破戒坊主：実は、極樂ではみんな神通力が使えることになっておる。だが、わしは神通力がどんなものかまったくわからんだ。

シャバ僧：非科学的だな。

破戒坊主：そうだ。うちの寺では、科学者は神通力が使えないから、仏僧のがすごいと本気で主張している。

シャバ僧：それはすごいな。どんな神通力なんだ。

破戒坊主：千里眼、地獄耳、読心術、神足通、宿命通、漏尽通だ。

シャバ僧：あんたはそれ、使えるのか？

破戒坊主：極樂へ行けばな。たぶん、なんとかなるだろう。

シャバ僧：如来蔵って何だ？

破戒坊主：如来蔵（アーガマ）とは、仏教の経典すべてのことだ。

シャバ僧：虚空蔵って何だ？

破戒坊主：虚空蔵とは、知恵のすべてのことだ。

シャバ僧：蓮華蔵って何だ？

破戒坊主：蓮華蔵は、たぶん、存在するものすべてが幸せになることだ。蓮華蔵は「華嚴経」という仏典に書いてあるのだが、わしは「華嚴経」を読んでないから、実は蓮華蔵が何なのかは知らない。

シャバ僧：等覚とは何だ？

破戒坊主：等覚とは、釈尊と同じことを悟ることだ。

シャバ僧：妙覚とは何だ？

破戒坊主：妙覚とは、釈尊の悟りよりすごい悟りのことだ。

シャバ僧：正覚とは何だ？

破戒坊主：正覚とは、本願が成就することだ。

シャバ僧：阿弥陀の本願とは？

破戒坊主：極樂成就だ。世界苦からすべてを救いたいという大慈悲心だ。

シヤバ僧：もし、阿弥陀が何千年前に本当にいたのなら。

破戒坊主：そうだ。もし、本当に何千年前に阿弥陀がいたのなら、我々は「阿弥陀くじ」をやるだけで極楽往生して、成仏できるのだ。

井戸の所有

誕生、冒瀆戦争、無知の時代、前触れ、啓示、秘密、侮辱、作詞の流行、詠唱戦争、

詩人が母から生まれた時、近所の人がいった。「神にかけて、何か驚くべきことが起こりました。」と。

キリスト教徒がやってきて、まだ赤ん坊の詩人を見てこういった。「この子を連れて、我らの王と我らの国へ来てください。彼には偉大なる未来が開けている。我々は、彼のことをすべて知っている。我々は、これから起きることをすべて知っている。」

しかし、詩人の母は、承諾しなかった。詩人が成長すると、近所の人がいった。

「彼のどこが伝説の男なんだ。あれではいけないだろう」「いや、彼を選んで星の高みに据えた主を愚かだというのか。」

詩人が占い師の前で「詠唱すべきものを歌うと、占い師たちはいった。

「精霊（ジン）が存在することや、死者が復活することが、本当だとは知らなかったんです。そんなことは冗談だと思っていました。」

キリスト教徒はいった。

「始まった。前触れだ。そのうち啓示が始まる。」

「降り注いだ流星を見たか」

「降り注いだ流星を見た。それが旅の運行を導いてくれる星であるならば、それは世界の終末を意味するのだが」

「何が起こるんだ」

「わからない。ある者は、これから起こることを知っているといっている。」

詩人はいった。

「ぼくのところに天使ジブリールがやってきたよ」

観客は興味をもった。

「それで、天使ジブリールとどうしたんだ」

「詩を歌った。神について歌った。多神教を廃棄して、ただ一人の神を崇めることを歌った。この世での勝利と、あの世での報奨を歌った。」

観客たちは、詩人を守護するために戦った最初の者となった。

「天使ジブリールが来訪するきみがこの程度とはね。」

ある男はいった。

「この程度ではないつもりだったよ、ぼくも。残念だ」

詩人は答えた。

人々の間で謎の会話が話された。

「いったいみんなどうしたんだ。みんなの様子が変だ。」

男たちが首をかしげていた。

「実は、秘密があるんです。秘密について話し合っています。」

「秘密とは何だ」

「ちよつとこつちへ来てください。誰かに聞かれるといけませんから。」

「ああ、なんだというんだ」

男がついていくと、女はいった。

「秘密があるんです。」

「だから、その秘密とは何だ」

「あまりにも問題が大きいので、みんなで相談しなければなりません。万が一にもまちがえるわけにはいきませんから」

「だから、その秘密とは何だ」

「はい。いいですか。心を落ち着けて、何をいわれても驚かないでくださいね。いいですか。」

「ああ、わかった。いってくれ。」

「神が実在するんです。これが秘密です。みんな、そのことについて話し合ってます」

詩人を侮辱するものが現れた。

男たちは、詩人を「嘘つき」と呼んだ。

「天を寸断して我らの頭上に落としてみよ。それでなければ、おまえを決して信じない。」

「おまえが保証人として、神と天使を連れてこないかぎり、我らはおまえを信じない。」

そして、侮辱するものと詩人は戦争をすることになった。

詩人は敵軍の前で詩を詠唱した。

「きつと、天が寸断されておまえたちの頭上に落ちる。必ず、神と天使がおまえたちの前に現れる。」

詩人が勝利したと聞いて、戦争の後で、女たちはたずねた。

「詩人はどのように戦いに勝利したのですか」

「詩を歌ったのです。誰も戦争などしなかった。みんなで歌の発表会をしたのです。」

詩人は詩を詠唱するだけで戦争に勝利した。

アラブの人々の間で、詩を作って音楽で歌うことが流行った。

男たちが眠った後。

女たちは、本当に天が寸断されて地上に落ちて、神と天使がやってきたのを見た。

男たちは目を覚ますと文句をいった。

「なぜ、神と天使を見ることができたのが女たちだけなんだ。おれたちも神と天使を見てもよいはずだ」

「女たちが嘘をついているのかもしれない。あるいは、そんなことはないだろうが、神はもしかしたら実在しないのかもしれない」

詩人を侮辱していた男たちは急に主張をひるがえしていった。

「もし、本当に預言者が現れたのなら、我らより先に奪われてはならぬ。預言者を我らのものとしなければならぬ」

男たちはいった。

「これでもまだ、詩人がただの詩人だというつもりですか」

「では、詩人とは何者だ」

男たちは悩んで答えた。

「詩人は、嘘つき、あるいは、世界の井戸です」

そして、詩人と砂漠の領主は戦争になった。

詩人の軍三十人は、何も神秘的なことのない普通の軍隊だった。迎え撃つ領主は二百一人の兵士がいた。

詩人の軍は次々と優れた詩を詠唱した。
これを詠唱戦争と呼ぶ。

詩人の軍は一日の戦いで勝利した。

「主が約束されたことが真実だと悟ったか」

と詩人がいった。

負けた領主は、

「主よ、もしこれがあなたからの真実なら、我々の頭上に石の雨を降らせてください」

と神に今さら訴えた。

石の雨は降らなかつた。

ユダヤ教徒やキリスト教徒は、

「こうなることはわかっていた。我々の啓典に書かれていることなので。神の計画の邪魔をしようとしたが、やはり無理だった」といった。

これがイスラムである。

これが中世の預言者である。

次の預言者は科学者の中から出るだろう。

神を近所で探す

神はどこにいるのだろうか。遠くで探すのも面倒だから、近くで探せば見つかるんじゃないか。

例えば、自分が引きこもっているこの部屋の中でも見つかるかもしれない。ぼくが神を見つけるのが早いかな。神がぼくを見つめるのが早いかな。どちらにせよ、勝負はこのぼくの自室だ。

ぼくは自室でのんびりと、出歩かぬ旅をして神を探す。一年もがんばれば見つかるんじゃないか。

神がどこにいるのかわからないが、部屋にこもっていても、神に触れているといえるのではないかな。だったら、この部屋で探した方が早い。

ちよつと日本古典に興味が出て、隠者文学などを散策したら、清少納言「枕草子」、一遍上人「一遍上人語録」、鴨長明「方丈記」、兼好法師「徒然草」、松尾芭蕉「おくのほそ道」、などに一通り目を通したら、柳宗悦「南無阿弥陀仏 付心偈」に行き当たり、こんな日本文学があったのかと驚いた。

そこに柳宗悦がこう書いていた。

「仏さまはどこにいるのでしょうか」

「おまえはどこにいるのか」

鋭い英知に感動して、「ああ、これは神は自分の部屋にいるなあ」「神に会いたければ、自分の部屋を探せば見つかるなあ」などと思ってしまう。

そうだ。ぼくはひらめいたのだ。近所を探せば、神は見つかるだろうなど。

世界はぼくの近所しか存在しないのかもしれない。ぼくの旅はすべて仮想現実だった。神は、この近所だけを創造したのだ。近所創造の神。

出不精なぼくだけでも、それでもちよつとは旅行などをしたなあと思うが、その旅行の記憶はすでにあいまいで、神を探す旅なら近所にしよう、そう目的地を決めたいところだ。

宇宙は、神の煩惱だ。

苦しみは、存在の別名だ。

奇跡は、自分の部屋にある。

このぼくの部屋で存在することを決められた近所の神がいるのなら、ぼくの部屋で生きているこの生の喜びこそが、存在の喜びであり、神の創造にまつわるいくつかの不手際が許される理由でもある。

宇宙創造の神は、被造物をあまり幸せには作れなかったと聞くが、それなら、ぼくの近所の創造神の方がよっぽどか賢い神なのではないか。

「神はどこにいますのでしうか」

「おまえはどこにいますのだ」

神を遠くで探すなど。

何にもわかっていない。探すべきは近所の神だ。近所の神は、全知全能にちがいない。まずは近所の神から探すとよい。世界はこの近所にしか存在しないのだから。

近所が存在することの証明は、遠方が存在することの証明より簡単なのだから。

神学者、哲学者、数学者は、近所の神の存在証明から始めた方がよい。そうすれば彼らは、きつと全知全能を見つけるだろう。

来たれ、近所の神。全知全能の近所の神。

遠方の神より、近所の神の全知全能の方が、現実である可能性は高い。

月のひかりや、空のつちくれ。

一遍上人

月の光も、空の土くれも、ぼくの部屋の窓から見えるのだから。

近所で神が見つかったら、土くれからヒトを作り出す手伝いがしたい。

必ず、近所で神は見つかる。それを信じて待つ。

中世イタリアの半球世界

機械学あるいは工学は最も崇高で他の一切の科学を超えて有用である。

by レオナルド・ダ・ヴィンチ

解剖、遠近法、構図、輪郭、運動と表情、衣服、モノクロ、色彩、光と陰影、ぼかし、厚塗り、風景、

1、解剖

十五世紀、イタリアで。

「神さまの頭まで解剖しなければならぬごとくに」

と、レオナルド・ダ・ヴィンチが書いている。

彼が本当に神の頭部を解剖した可能性にかけて、日本の外科医はダ・ヴィンチを外科医ロボットの名前に当てている。

2、遠近法

レオナルド・ダ・ヴィンチは手記の中で、東方旅行中に預言者を発見したと書いている。もしそれが本当なら、いったいどんな預言者がどんな預言をしたのだろうか。

もし天上にも空気が存在し、天体が空気との摩擦で減速するのなら、おそらく天上の星は中世イタリアに落下してくることだろう。

ダ・ヴィンチはそのことに気づいていた。ダ・ヴィンチが発見した預言者ジロラモ・サヴォナローラは、天体の落下と格闘したのだ。

天体が空気との摩擦で音を鳴らす。ダ・ヴィンチは鳥の飛翔を解剖によって研究して、飛行機を製作していた。もし、ジロラモがそれに乗って天上へ行ったのなら。

3、構図

この絵画は、天上の創造主の視点から見た地上の肖像画である。

絵画の視点が天上の神にあるといっても、画家であるダ・ヴィンチが天上からこの絵を描いたというのはあやまりである。しかし、もしかしたら。

4、輪郭

リザ・デル・ジョコンドの顔は整っていて穏やかだ。

ダ・ヴィンチがそれを天上から眺めて描いたということはないだろう。

地上の被写体。

ダ・ヴィンチの肖像画というと、「最後の晚餐」か、あるいはこの案外有名な女性ということになるだろう。最後の晚餐の人物たちは神性を帯びているが、この女性の方は平凡なイタリアの婦人である。

創造主が愛でるのは、とびきりの美人ではなく、醜いものにも配慮したそこそこのひかえめな美しさだといわれている。ダ・ヴィンチの審美眼は否や？

5、運動と表情

彼女は、絵画が完成するまでの七年間、普通に暮らしていたのではないだろうか。彼女は普通に飲食して、就寝し、料理や買い物などの家事も行っただろう。七年間も絵画の製作に関わって、画家と何にもないはずがないだろうという人もいるかもしれないが、そのようなまぢがいはないことを画家と御婦人とその亭主の名誉にかけて、ぼくは主張したい。しかし、あるいはもしかしたら。

6、衣服

モナリザの肖像画における衣服は、黒色の落ち着いた衣服である。七年間、ずっと同じ服を着ていたとは思えないので、モナリザは同じ服を何着ももっていたと考えるのが、洗濯について常識的に考えられる推理である。

7、モノクロ

ヒトとは異なる色覚をもつ神の棲む天上は、はたしてそこはどんな色で彩られているのか。わずかなりとも可能性として、モノクロというのもありえるとぼくは主張したい。あるいは、もしかしたら。

8、色彩

天上に向かったジロラモを地上から見上げるダ・ヴィンチとモナリザ。

地上には神に許された色の数のなんと少ないことか。

ダ・ヴィンチは、モナリザの肌を黄色くぬっている。それがダ・ヴィンチの配色だ。そこに人種的批判を持ち込むのはやめた方がよいだ

ろう。確かに、モナリザの肌の色で戦争が起こるかもしれない。画家ダ・ヴィンチはそのことを考慮して描かなければならなかったのは、おそらくそうだろう。

9、光と陰影

神の光と、ダ・ヴィンチの光。

神の光は地上に降り、ダ・ヴィンチの光は絵画に降る。

あるいは、もしかしたら。

ダ・ヴィンチの絵画世界では、光の法則はダ・ヴィンチによる。

10、ぼかし

モナリザを描いたダ・ヴィンチの筆致は、ぼかしという技法である。預言者ジロラモは天上で、天体の落下と戦っていた。地上のダ・ヴィンチが描いている肖像画よりも、ありえないほど素晴らしい絵画がおそらく天上にはあったのだろう。人類史上最高傑作といわれるリザ婦人の肖像画より遥かに優れた絵画が天上にはあったのだろう。ジロラモはそれを見たのだ。ダ・ヴィンチは見る事ができなかった。ジロラモは、ダ・ヴィンチより優れた画家に天上で会った。

11、厚塗り

ジロラモが天体の落下を防ぐべく、支柱を組んでいる。

地上のダ・ヴィンチも星々の落下を防ぐべく肖像画を厚塗りする。

リザ婦人も作品の完成を待って心躍る。

12、風景

風景。

最後に描くもの。

おまけであって、それに熱中することもある。

なぜか、天上の神も、生き物を造るよりも、その後で風景を造ることに熱中してしまい。

ヒトより風景の方に、地球では熱心に造り込まれている。

13、未完

レオナルド・ダ・ヴィンチは、肖像画「モナリザ」を七年に渡って描き、未完成のまま亡くなってしまった。あるいは、もしかしたら。

楽欲と求道

華のことは華にとえ、紫雲のことは紫雲にとえ、一遍は知らず。

b y 一遍上人

悟りなどという不調法、いたしたる覚え無之候。

b y 一休宗純

自宅にこもって書物を読みながら暮らしている。仏教とは何なのかとんとわからない。高名な仏僧がいう如意庵（意のままの住居）やなすことなき悟りの宮殿に住んでみたいと思うが、それも叶わない。

これは仏教に限ったことではないが、ヒトが生きるには、楽欲（らくよく）と求道（ぐどう）が必要だ。

ぼくが哲学書や宗教書を読んでいるといつても、悟りが何なのかはとんとわからない。聞いてくれるな。

悟りとはあれかなと思うことは二、三あるけど、それが一つではないので、おそろくぼくの想像している悟りは悟りじゃない。悟りの種類が複数あるということも当然あるだろう。仏僧は一生のうちに何度も大悟するという。みんな好き勝手に悟ればいいじゃないか。

まだ道半ばとはいえ、ぼくが経典を読んで知るところによると、どんな高僧だといつても、ずいぶん仏道は頼りないものだ。

禅僧は禅を知らずとみずから笑う。

六字の念仏も、ぼくが仏教書を読んで解釈するには、無念仏でも阿弥陀はやってくる。悪人だろうと救われるという悪人正機は当然のこと。それくらいでぼくたちを見捨てる仏教じゃないさ。

さつき読んだ「大乘仏教概論」でも、「愛を肯定する明治仏教」を鈴木大拙が述べていたぞ。

「日常の努力は、俗っぽいことばかりである。」と一休宗純もいつていた。悟りや仏教なんてものも、聖人の生き方などではなく、日常生活を埋めてこそだろうなあ。

やる気のある仏僧がいても、師匠が教えるのが方便では、悟りを開くのはたいへんだらう。

どれだけ経典を読んでも、仏道の極意が教外別伝にあるというな

ら、それはどの師匠を選ぶかで悟れるかどうかが決まってしまうそうだ。

ぼくはこれからの日本には、楽欲と求道が必要だと思う。楽欲と求道は、仏教に限ったことではない。

如来とは、あるがままにあるという意味だ。あるがままにあるまま幸せになりたかったが、やはりそれは難しいようだ。

この文章も、仏教を説明しようとしているわけではなく、宗教にこだわらない現代思想を語りたくて書いているものだ。そうになると、みんなに主張したいのは仏教の教義ではなく、別のことになってしまう。それは、次のようなことだ。

本当に賢い人は、神とか悪魔ということばにとらわれずに、事実の確認を把握しているものです。そのためにはメモが必ず必要です。

土着神と来訪神

太平洋に島があった。その島には人が住んでいた。

島の神主が「ちゃんと祖先を祭らなければ災厄が起こる。」と主張して、古来から伝承される祠の神社を守っていた。

島民は、

「ご先祖さまとサルとの区別がつきません。」

と述べた。その島の家にはどこでも木彫りのサルがあった。

神主は、

「この島の島民の先祖はサルなのです。」

といったが、島民は納得せず、

「いや、わたしたちはヒトなのだから、サルとはちがう。」

と、反論した。

そして、どちらも言い分をゆずることはなく、ご先祖さまがサルかヒトか論争が起きた。

島民の祖先の候補の名前がいくつか挙がるものの、サルである可能性も高いとなり、島民たちから先祖がサルでは納得いかないと苦情が出た。

「ご先祖さまは、この島で生まれたのか」

という島民の主張に、

「そうだ。この島で生まれたサルからわたしたちが生まれたのだ。進化というものがあるのだ。」

と神主は説明した。

「アフリカ起源説はどうか。先祖のサルがアフリカから海を渡ってきたのか」

「それはちがう。ご先祖さまはもともとの島にいた。先祖のサルは土着神なのだ。」

「土着神？　なんだ、それは。」

「島にもともといた神ということだ。」

「学説と比べて不自然だ。」

と島民が生半可な知識で食い込んだ反論をするので、神主も頭に血

がのぼってきた。

「この島の島民は、アフリカとは別にヒトへ進化したのだ」

と神主はどうとうぶちまけてしまった。

「外国を敵にまわすのか。行きすぎた民族主義は争いを産むぞ」

などと島民の言い分はひるむことはなかった。

「先祖のサルが海を渡った可能性がある」

「ご先祖さまのサルとなれば、船を作って太平洋を渡ったくらいやったのではないか」

「古代文明があり飛行機に乗ってやってきた説をわたしは主張する。この島にも超古代文明があったのだと信じたい。」

島民はさんざん勝手なことをいった。

「わたしたちはみんな船乗りの子孫だ。船乗りの民族として、海を越えるものを称え、来訪神を尊敬し祝福するものだ」

と島国神話をいいだした。

土着神と来訪神の対立と調和は、太平洋諸島文明では新しく指摘された理論であり、無視するのは難しかった。

神主は頭にのぼって血がおさまらず、

「我が島には古来から土着神がいて、来訪神より偉かった。我が島の先祖は、サルとカラスであり、この二つの土着神がどんな来訪神より偉い。」

とまくしたてた。

「だったら、先祖のサルとカラスはどこから来たんだ。海を泳いできたんじゃないのか。」

と島民は追求をやめない。

「いや、ご先祖さまは海を渡ったのではなく、海水から作られたのだ。我々は海から生まれた。この近くの海からだ。」

まあ、それでいいか。と島民はあとは神主に任せて帰宅した。

太平洋には、来訪神に征服されなかった土着神がたくさんある。征服されずに残った土着神は、おそらく海を越える英雄より価値のある何かを伝えているのだ。それがサルであるにせよ、カラスであるにせよ。土着神は「来訪神を尊べ」といい、来訪神は「土着神を尊べ」と

いうのだ。それが船乗りなのだ。

最後に、島民は、

「我らの島には、征服されなかった土着神がいる。征服されても蘇る土着神もだ」

といった。

海蔵経典

浦島は黄金宮殿（金閣寺）にいた。

浦島は、空想科学小説の読みすぎで統合失調症になった。

浦島の心には幻聴が聞こえてきた。

これは一大事と考えた浦島は、幻聴を治すために旅に出た。

海岸の神社に行くと、巫女がいた。

巫女は、土星神託、木星神託、火星神託、水星神託、太陽神託の五つの木の札を差し出し、

「好きなものを選んで取ってください」

といった。

浦島は、土星神託を選んだ。

巫女は神懸かりとなり、土星神託を表していった。

「浦島よ、竜宮へ行け。竜宮へ行けば幻聴は治る。」
と。

浦島は竜宮へ行ってくれる船を探した。

すると、海岸におかしな村人がいる。

見ると、それは貧乏神、疫病神、死神（しにがみ）だった。

貧乏神、疫病神、死神が巨亀をいじめていた。

あんなでっかい亀がいじめられるのかよ、と浦島は不思議に思ったが、巨亀にも複雑な事情があるだろうから、仕方ないと思って巨亀を助けた。

貧乏神、疫病神、死神は逃げて行った。

助かった巨亀はいった。

「こんなことがあるはずない（ありがたい）」

といった。

「おかげで助かりました。お礼に竜宮へ連れて行ってあげましょう」

それは願ってもないことだと浦島は巨亀に乗った。

浦島は、幻聴が聞こえるのでいらいらしていた。

泡のようなものを巨亀が作り、その中に入ると海中でも呼吸ができた。

そして、しばらくすると、海底にある竜宮に着いた。

竜宮には、仙女がいて、浦島をもてなした。

「海蔵経典を探しているんですよ」

と浦島が聞いた。

海蔵経典とは、竜宮に隠された仏典のことだ。

「どこでそれのことを知ったのですか」

と仙女が聞いた。

仙女は驚いたようだ。

「幻聴で聞こえてきたんです。竜宮には海蔵経典があると」

「幻聴で？」

「はい。むかし読んだ空想科学小説と幻聴の記憶の区別がつかないんです」

「海蔵経典は、魚眼観音の巨大貝の中にあると聞きます」

それではそこに取りに行ってくださいと、浦島は巨大貝に歩いていった。

巨大貝のところには魚眼観音がいた。

「海蔵経典をゆずってくれないか。そこに統合失調症の治し方が書いてあると聞く。」

浦島がいった。

「なぜ、海蔵経典などを求めるのだ。竜宮には、金銀財宝、酒池肉林、他に楽しいことがたくさんあるだろう」

魚眼観音がいった。

「いや、おれたち統合失調症患者は、金銀財宝でも手に入れることのできない『統合失調症の治し方』を求めているもんだ。『統合失調症の治し方』は、金銀財宝より尊いものだ」

「ならば、仕方ない。海蔵経典が欲しいのならば、力づくで奪うがよい。わしはそこそこに強いぞ。かかってこい」

魚眼観音がけしかけ、浦島が受けてたった。

「望むところだ」

そして、二人はぶつかりあった。

「八門遁甲」

「奇門遁甲」

勝ったのは魚眼観音の方だった。

悔しがらる浦島。

だが、魚眼観音はいった。

「勢いで喧嘩を売ってしまったが、別に海蔵経典を持っていくのではなく、書き写していくのなら、かまわないぞ。そうするがいい」

それはありがたいと浦島は、紙と鉛筆で海蔵経典を書き写した。

海蔵経典には、『統合失調症の治し方』が書いてあった。

浦島はそれを実行して統合失調症が治り、里へ帰ってみんなに言い伝えた。

そして、その後、統合失調症の冒険者たちが竜宮の海蔵経典を探し求めるようになった。

西洋の神を日本で探す

むかしむかし、明治の頃、西洋人が日本へやってきて神を探した。
西洋人は、

「全知であり、全能であり、あらゆる束縛から自由なものを探している」

といった。

「いや、そういうものなら日本にたくさんあるからなあ」

と現地の日本人は困った。

「日本は多神教だからねえ」

日本人は渋った。

「不死であり、永遠であり、誰よりも高貴で、誰よりも偉大なものである。そういうものを見たことがありますか」

と西洋人は聞いた。

「そういうものなら、この村にもいるし、隣村にもいる。東京へ行けばもつという」

「彼は、宇宙を創造する。彼によって宇宙が始まり、彼によって宇宙がつづき、彼によって宇宙が終わる。そういうものを探しているんです」

「ええ、それです、それです。おそらくあなたたちの神はこの村にいます」

日本人がそういうと、西洋人は驚いた。

「まちがいがないか、よく確認してください。もし本当に彼が見つかるなら、それはとんでもないことなのです。もつとよく確認してください」

「どんな人でしたっけ」

「彼は、宇宙の目的、人類の目的、道徳の目的を決めるものです。彼は、絶対者だ。彼は、あなたの守護者であり、世界の統治者であり、宇宙の支配者です。本当に、あなたの村にいますか」

日本人は集まって相談した。

「西洋人のいう神って、三日前までいたあいつじゃないか」

「おれもそんな気がする。三日前にあいつなら村から出て行ってしまったぞ」

「困ったな。なんていう」

日本人は西洋人にいった。

「やっぱり、神はちよつと前までこの村にいましたよ。でも、たぶん、追いかけても無駄だと思えますよ」

「いえ、神の探索は、人生をかけて、民族の存続にかけて重要なものなのです。確認しますが、その神は、万物によって祝福され、万物によって礼拝され、万物によって献身されていましたか。彼はあらゆるものに遍在しているので、わたしの中にも彼がいて、あなたの中にも神がいることになります。しかし、わたしたちは、ぜひ、彼の本体に会いたい。協力してくれますか」

「協力するっていわれても難しいですよ。彼が見つかるかどうか」
「あなたが神を探すことは、同時に神があなたを探すことでもあるのです。だから、見つかるはずですよ」

日本人は懇願する西洋人に答えていった。

「あなたたちのいう神は、三日前までこの村にいました。神は三日前に東に向かって出港して、船が大破して水没しました」

西洋人は困った顔をした。

「どうする。このまま海に水没した神を探すか」

西洋人同士で相談が始まった。

「彼は、宇宙の中であって、宇宙を調べるだけでは見つからない隠れた存在だ。隠れた存在である彼が見つかったのは、その理由を理解することは、おそらくどんな人間にも不可能だ。水没した神は、何か意図があったにちがいない」

「報告しよう。永遠が見つかったと本国に手紙を」

「わたしには書けそうにない。きみが手紙を書いてくれ」

「どう書けばいい。水没した神について」

「すまない。わたしの信仰が途切れそうだ」

「あきらめるな。しかし、今こそ神に祈ろう」

ブリハツドの神学的応用

「一切の存在の中に居住し、一切の存在とは別のものであり、一切の存在が知ることなく、一切の存在を肉身とし、一切の存在を内部から制御するもの、それがあなたのアトマン（真我）であり、不死の、内部の抑制者であります。」

ブリハツド・ウパニシャツドより

1、それはどのような存在か

それが発見されてから、ずっと人類が戦ってきたもの。

人類を支配しているもの。

それに備えよと伝承された古代からの警告。

ヒトの精神と身体を制御しているもの。

それがヒトの外部にあるのか、内部にあるのか、わからない。

目に見えない支配者。

原因はわからないが、ほとんどどの民族にも伝わっている存在。

人類の勝ち目のない戦い。

それはあまりにも強大な存在のため、それと戦うよりも従った方がよいのではないかという意見。

賢者たちは、それを崇めて従うふりをして、なんとか人類の勝利を得ようとしてきた。

蚊のような敵。

2、歴史

それはさまざまな文献に古代から触れられている。

古代インドで、紀元前八百年前にブリハツドが「ブリハツド・ウパニシャツド」で。

古代中国で、伏羲が「易経」で。

古代ギリシャで、紀元前四百年前にプラトンが「パイドン」で。

中世インドで、西暦七百年頃にシャンカラが「ウパデーシャサーハスリー」で。

中世日本で、西暦七百年頃に稗田阿礼が「古事記」で。

それについて書き記したことは確認されている。

探せば、もつと多いだろう。

3、作戦

味方は多い方がいい。

人類の全軍をかけて戦うべき。

人類の全軍をあげて戦うべきなほど、それは強大で人類には勝ち目のない戦い。

まず、敵を発見することから始めなければならない。

偵察兵を増やすべきだが、解剖学を習得した兵士しか偵察は期待できない。

布陣は考えるだけ無駄だ。

4、戦況報告

人類が総軍で戦ったのに、勝てなかった。

あの支配者と戦うのは、また百年後にしようとした。

宇宙が消滅した、と勘ちがいのした。

賢者がいうには、あれは人類のすべての兵士の精神を操っている。

人類の賢者がみんなバカに思える。

5、科学的解明

科学者は、どこが賢いのかわからない古代の賢者たちが警告していた「ヒトの精神と身体を制御する謎の支配者」は「魂と名付けられていた無意識のこと」だと解明した。

神の無意識、イエスの無意識、宇宙の無意識、物自体の無意識、コンピュータの無意識、いろいろな無意識が想定されるが、それらへの研究は、空想科学小説家や文学者に任せられた方がよいだろうと報告した。